

関西女子短期大学学生における ボランティア活動の動向

——地域支援交流センター委員会の活動を通して——

濱元一美*, 池田昭子**, 中山真理***,
小西俊子****, 森 愛*****

Trends in volunteer activities among students of Kansai Women's College :
Activities of the Community Support and Involvement Center Committee

Kazumi Hamamoto, Akiko Ikeda, Mari Nakayama,
Toshiko Konishi and Ai Mori

概要：関西女子短期大学における地域支援交流センタープログラムには、施設や行政の事業に伴う「子育て支援」や「高齢者施設などの介護支援教育」、あるいは「救急時の対応教育」などがあり、学生がボランティアとして活動できるプログラムは豊富である。2009年度、地域支援交流センター委員会では、ボランティア活動に参加した学生の動向を把握することを目的とし、参加後の学生に対して調査を行った。その結果、延べ804名もの学生がボランティア活動に参加していた。参加理由は、「授業に役立つと思った」「興味があった」「先生に勧められた」など、ボランティアの特性である自発性を示すものから、他者からの働きかけが関与しているものなど、プログラムによってさまざまであった。また、大半のプログラムにおいて、ボランティア活動に参加して「大変よかった」「よかった」と回答する学生が約90%以上であった。学生の自由記載には、体験を通じた学びや感動などが多く綴られていた。ボランティア活動は主体的に学べる自己教育の場として、学生のスキルの獲得につながっていることが示唆された。今後、さらに多くの学生がボランティア活動に参加できるよう検討したい。

Abstract : Kansai Women's College Community Support and Involvement Center provides a range of programs facilitating student volunteer activities, such as "childcare support" and "welfare support education in facilities for the elderly" implemented through institutions and administrative projects, or "emergency response training". In 2009, in order to identify trends in student participation in volunteer activities, the Community Support and Involvement Center Committee conducted a survey of students after they had participated in activities. The results showed that a total of 804 students participated in volunteer activities. The

*関西女子短期大学 准教授

**関西女子短期大学 教授

***関西女子短期大学 講師

****関西女子短期大学 非常勤講師

*****関西女子短期大学 大学事務局 職員

reasons for participation varied widely according to the program, ranging from the proactivity characteristic of volunteering to encouragement from others, for example, "I thought it would be useful for classes", "I was interested" and "The teacher advised me to participate". In the majority of programs, over 90% of students replied that participating in volunteer activities had been "very good" or "good". In the free-response section, students frequently described what they had learned and felt through their experiences. As a site of independent self-education, volunteer activities seem to be linked to students' acquisition of skills. This suggests a need to investigate ways of encouraging even more students to participate in volunteer activities.

Key words : 地域支援交流センター委員会 Community Support and Involvement Center Committee
 地域支援交流センター委員会 Community Support and Involvement Center program
 ボランティア volunteer 自己教育 self-education

I. はじめに

少子・高齢社会が進行するなかで互いに助け合う豊かな社会が求められ、他者を理解し尊重する能力が問われてきた。一般に、人は他者とのかかわりのなかで他者を理解し、両者のおかれている状況を認識する¹⁾。1997年に「介護など体験特例法」が制定され、小学校、中学校の教諭の免許取得希望者に高齢者や障がい者に対する理解を深める体験を持つことが義務付けられ、また、学校教育では、社会福祉施設の見学や交流教育など、心の豊かさを育み人への優しさを学ぶものとして、高齢者や障がい者の方々とふれあいや交流を持つ取り組みが成されてきた。また、各地域や保育園などでは国の「子育て支援」政策の下、子育てにかかわる支援が進められている。教育現場では、教科指導に留まらず、学校行事や学校と地域の協同に関する実践が広がってきている。関西女子短期大学では、「地域支援交流センタープログラム」として、施設や行政の事業に伴う「子育て支援」や「高齢者施設などの介護支援教育」、あるいは「不登校・児童生徒支援」などの活動を展開し、学生はそれらのプログラムにボランティアとして自由に参加することができる。

各対人的社会的な意味での心の豊かさについ

て、梶田は「他の人たちと交わり、それによって社会的な刺激を受け、自分の言動を他の人のそれとの関係でコントロールし、さらには他の人の気持ちの動きにも関心を持つようになる²⁾」という。学生は、ボランティア活動を通して、さまざまな人と出会いそのなかで多くの体験をし、さまざまな学びを得ると考える。吉村³⁾は、自分に与えられている才能とは、特殊な才能を意味するのではなく、すべての人に異なった特性、才能が与えられているとした上で、「自分に与えられている才能、特性、時間、財をなんらかの形で他者と分かち合う生き方の表現形態の一つとして、『ボランティア活動』がある」と述べる。その一方で、「ボランティアという私的な営みが、評価の対象となり、人のために何かする行為=ボランティアとされてしまうと、行為の主体である内面が問われないままに、ひたすら「美德」という奉仕だけがボランティアになってしまうのではないかと懸念している。本学のプログラムは、子どもや高齢者、障がい者などと接することが多いことから、人に対して何かをする行為や奉仕だけを活動として捉えがちになるが、学生の自発性を最優先に捉えることが極めて重要なのである。前田⁴⁾は、ボランティアには自分の考えや生き方を変える力や何かしてあげたいと思っていた人

たちに、自分が何かしてもらっていることに気づかされる力があるとし、「奉仕」ではなく「改革」であると指摘する。ボランティアによって、新たな発見や学びを得ることは自己教育につながり、新たな可能性を導き出すと考える。

しかしながら、本学における学生のボランティアについて、各プログラムを担当する教員が主となって学生指導を担ってきたのが現状であり、その全体を把握するには及んでいなかった。そこで、2009年度、地域支援交流センター委員会では、ボランティア活動に参加した全学生の動向を把握することを目的とし、参加後の学生に対して調査を行ったので、ここに報告する。

II. 対象と方法

2009年4月2日付けにおける関西女子短期大学の在籍学生数は、保育科205名（1年90名、2年115名）、保健科193名（1年84名、2

年109名）、歯科衛生学科307名（1年106名、2年97名、3年104名）であり、対象者は、そのうち地域支援交流センタープログラムによるボランティア活動を行った学生（延べ数804名）とした。方法は、参加した活動回数を問わず、1活動後に1回、学生に対してマークシートによる回答と自由記載による調査をした。

表1は、2009年度の地域支援交流センタープログラムを示し、調査対象となったプログラムである。全科共通として、「柏原市との連携プログラム」があり、柏原市の子育て支援事業であるほっとステーションに集う子ども達と遊びを通じた活動や親子歯磨き支援などである。保育科担当では、保育ボランティア、多胎児子育て支援、地域子育て支援、臨床保育ボランティアの「子育て支援プログラム」があり、保育園や地域、入院中の子ども達とのふれあいを通じた支援である。また、保育者の卒後教育セミナーでの活動として「保育に関するリカレント教育」、合唱講座、定期演奏会である「音楽を

表1 2009年度地域支援交流センタープログラムについて

プログラム	担当学科	内容	
柏原市との連携プログラム (ほっとステーションとの連携)	全科共通	親子歯磨き支援等 子どもとの遊びボランティア	
子育て支援 プログラム	保育ボランティア	保育科	「ピッコロ」におけるボランティア
	多胎児子育て支援	保育科	「ジュモ」におけるボランティア
	地域子育て支援	保育科	「はらべこ青虫」におけるボランティア
	臨床保育ボランティア	保育科	入院中の子ども支援ボランティア
高齢者施設等におけるボランティア	歯科衛生学科	高齢者施設等に対する支援ボランティア	
子どもの歯磨き支援	歯科衛生学科	子どもに対する鹿に係わるボランティア	
不登校児童・生徒支援	養護コース	特別支援ボランティア・不登校支援ボランティア	
地域と連携した健康教育	養護コース	保健所や幼稚園等での健康教育ボランティア	
保育に関するリカレント教育	保育科	地域市民と幼稚園教諭・保育および学生に対する講座	
音楽を通じた 豊かな情操教育	合唱講座	保育科	地域市民の合唱講座
	定期演奏会	保育科	地域市民と合唱講座と保育科学生と附属幼稚園児との定期演奏会
救急対応教育	保育科	地域市民と学生の赤十字養成講座 (救急法救急員養成講習)	
アニマルとの豊かな生活支援教育	医療秘書コース	地域市民と学生のアニマルセラピー講座	

注) 各プログラムの記載は、学内のプログラム番号の順に準ずる。

通じた豊かな情操教育」、そして、「救急時の対応教育」は、日本赤十字社による救急法救急員養成講座であり、取得した資格によって地域に貢献しようとする活動である。歯科衛生学科担当では、「高齢者施設などにおける介護支援教育」があり、高齢者施設や障がい者施設での入所者や通所者とのふれあいを通じた支援、そして、「子どもの歯磨き支援」は、子どもを中心とした歯磨き支援である。養護コース担当では、「不登校児童・生徒支援」として、特別支援学級や不登校の子ども達とのふれあいを通じた活動、「地域と連携した健康教育」保健所や幼稚園などでの健康教育に関する活動がある。医療秘書コース担当では、「アニマルとの豊かな生活支援教育」として、地域市民と学生が動物を介在させたセラピーについて、共に学びその学習効果を施設などで実践する活動である。

Ⅲ. 結 果

1. 参加した学生の学科(コース)とプログラム

各プログラムによってボランティア活動に参加した学生は、延べ 804 名にも上っていた。

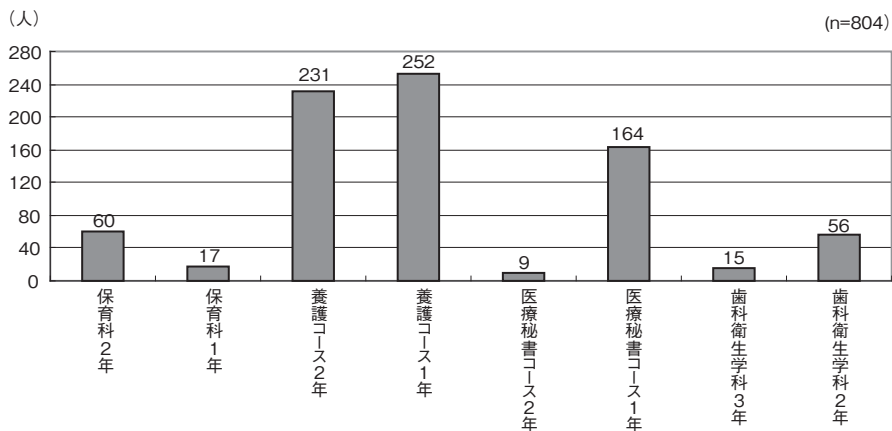
図 1 は、ボランティア活動に参加した学生についての学科(コース)内訳である。「養護コース 1 年」が最も多く 252 名、次いで「養護コース 2 年」の 231 名であった。学科(コース)

全体としては、「歯科衛生学科」が最も少なく、3 学年の学生が在籍しているにもかかわらず全学年を合わせても 71 名に留まった。

図 2 は、学生が参加したボランティア活動のプログラムである。「不登校児童・生徒支援」が最も多く 51.2% (414 名) を占めた。次いで「アニマルとの豊かな生活支援教育」の 18.5% (149 名)、そして、「子育て支援プログラム」7.2% (58 名)、「救急時の対応教育」6.6% (53 名) となった。全科共通であるにもかかわらず「柏原市との連携プログラム」は 6.2% (48 名) に留まった。また、「高齢者施設などにおける介護支援教育」5.2% (43 名)、「地域と連携した健康教育」4.6% (37 名)、「音楽を通じた豊かな情操教育」は、0.2% (2 名) であった。「子どもの歯磨き支援」および「保育に関するリカレント教育」については、該当者がなかったが、これは 2009 年度に学生が参加できるイベント開催がなかったためであった。

2. 参加した理由

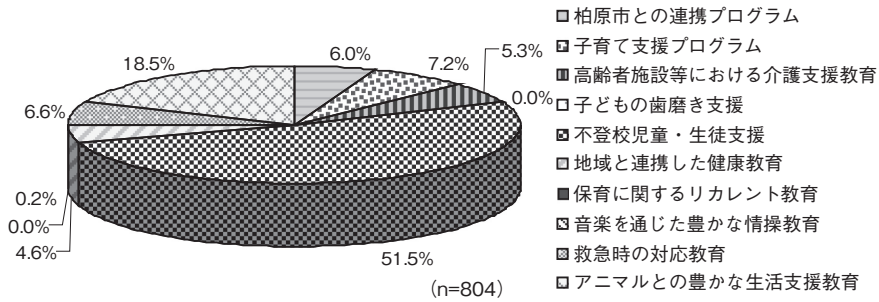
図 3 は、学生の各プログラムへの参加理由であり、回答はすべて複数回答である。各プログラムに参加した延べ人数を母数とし、プログラムごとの参加理由についての割合を示している。各プログラム間で学生がボランティアに参



注) 延べ人数を示す

図 1 ボランティア活動に参加した学生の学科(コース)内訳

濱元一美他：関西女子短期大学学生におけるボランティア活動の動向



注) 凡例は、学内のプログラム番号の順に準ずる。

図2 学生が参加したボランティア活動の内容

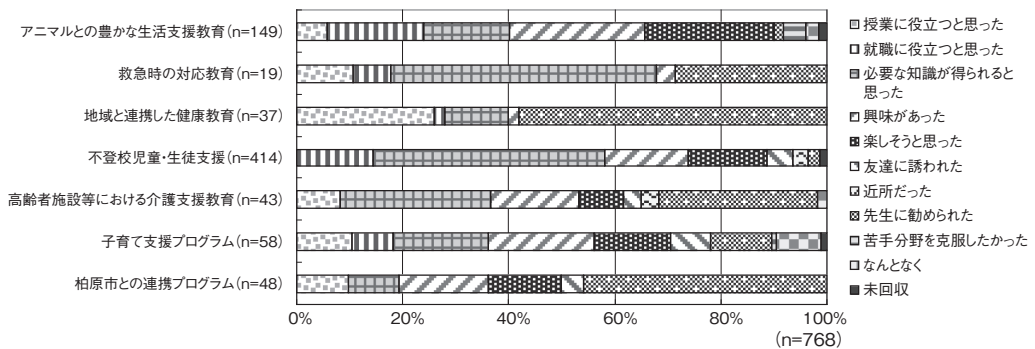


図3 各プログラムへの参加理由 (複数回答)

注1. 「救急時の対応教育」は参加者53名中回答のあった19名のみ集計した。

注2. 「音楽を通じた豊かな情操教育」は2名のため省略した。

加した理由はさまざまであった。なお、「救急時の対応教育」については、調査用紙の未回収者がいたため、これ以降の調査すべてにおいて回収者(19名)のみの結果とした。また、「音楽を通じた豊かな情操教育」については、参加学生が2名であったため省略した。

選択理由のうち、「授業に役立つと思った」は、「地域と連携した健康教育」の参加学生が最も多く選択し、26.0%であった。「就職に役立つと思った」は、「動物との豊かな生活支援教育」の参加学生が最も多く選択し、18.2%であった。「柏原市との連携プログラム」や「高齢者施設などにおける介護支援教育」については、授業には役立つと考えているものの就職には直結しないのか、「就職に役立つと思った」を選択する者はいなかった。また、「必要な知識が得られると思った」は、すべてのプロ

グラムで選択された。なかでも「救急時の対応教育」の参加学生が最も多く選択し、50.0%であった。次いで、「不登校児童・生徒支援」の参加学生の43.8%が選択した。この両プログラムでは、「必要な知識が得られると思った」は約半数の学生が参加理由に挙げていたことになり、「高齢者施設などにおける介護支援教育」でも約3割にあたる参加学生の選択があった。

「興味があった」と「楽しそうと思った」について、最も多かったのは「動物との豊かな生活支援教育」の参加学生であり、いずれも約4分の1の学生が選択した。また、「子育て支援プログラム」の参加学生は、「興味があった」を選択する者が最も多く20.0%であった。「友だちに誘われた」や「近所だった」については、どのプログラムにおいても選択した

者は少なかった。「友だちに誘われた」で最も高い値は 7.6% であり、プログラムは「子育て支援プログラム」に参加した学生であった。また、「近所だった」を選択した者は、「高齢者施設などにおける介護支援教育」の参加学生の 3.3%、「不登校児童・生徒支援」の参加学生の 3.0% だけであった。

「先生に勧められた」を選択した者は、プログラムによるばらつきがみられ、「地域と連携した健康教育」の参加学生は、58.0% が選択した。また、「柏原市との連携プログラム」の参加学生では、45.8% が選択した。これは、この両プログラムとして、最も多い選択理由でもあった。その一方で、「アニマルとの豊かな生活支援教育」の参加学生は 1.8%、「不登校児童・生徒支援」の参加学生は 2.2% と、いずれも「先生に勧められた」を選択する者は非常に少なかった。

「苦手分野を克服したかった」は、「アニマルとの豊かな生活支援教育」の 4.2% と「子育て支援プログラム」の 1.0% の各参加者が選択したに留まった。

3. 参加するために気をつけたこと

学生がボランティアに参加するにあたり気をつけたことについても各プログラムによっても、さまざまであった。各プログラムに参加し

た延べ人数を母数とし、プログラムごとに参加するために気をつけたことについての割合を示している。「遅刻しない」について、「柏原市との連携プログラム」と「不登校児童・生徒支援」のプログラム以外、最も多くの学生が選択した。つぎに多かったのは、「身だしなみを整える」であり、「高齢者施設などにおける介護支援教育」と「地域と連携した健康教育」については、25.8% の学生が選択した。その一方で、「必要な勉強をする」については、選択する学生が少なく、「不登校児童・生徒支援」の参加学生が 6.9% 選択し、プログラムのなかでは最も多かった。各プログラムによって、ボランティアの内容および参加する学生は異なり、事前に心がける内容に差異が生じていた。

4. 事後報告

図 5 は、ボランティア活動後の意識について示している。ボランティア活動に参加して「大変よかった」「よかった」と回答する学生は、すべてのプログラムで 80% 以上となり、そのうち 5 項目のプログラムについては 90% 以上と、非常に高い値を示した。

自由記載について、子どもや保護者と接する機会に恵まれる「柏原市との連携プログラム」や「子育て支援プログラム」では、「赤ちゃんが自分の腕の中で眠ってくれてすごうれしか

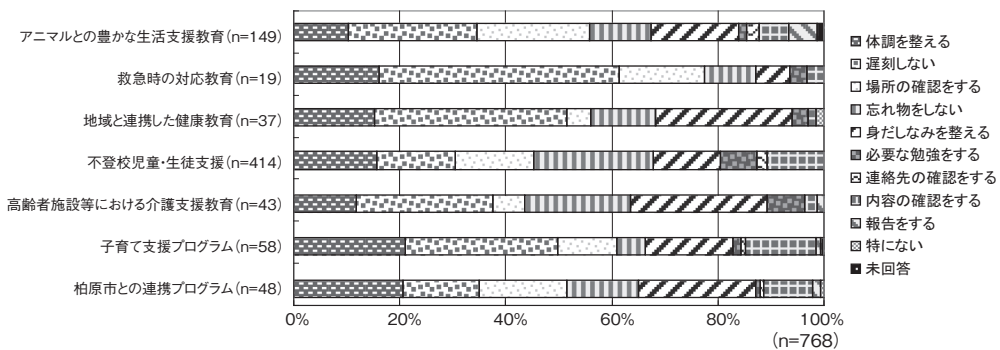


図 4 参加するために気をつけたこと (複数回答)

注 1. 「救急時の対応教育」は参加者 53 名中回答のあった 19 名のみ集計した。

注 2. 「音楽を通じた豊かな情操教育」は 2 名のため省略した。

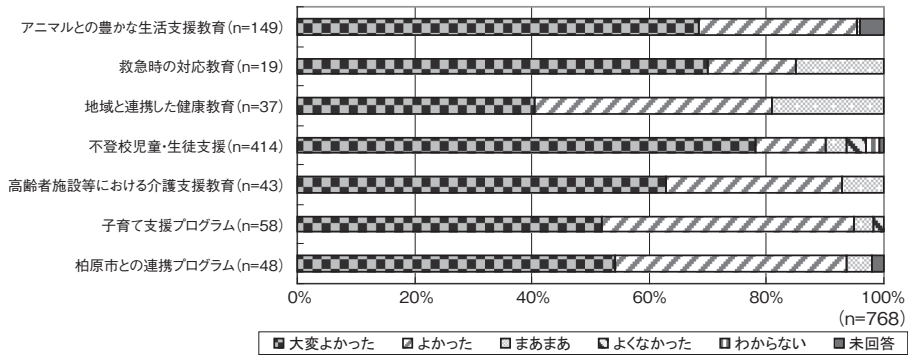


図5 ボランティア活動後の意識

注1. 「救急時の対応教育」は参加者53名中回答のあった19名のみ集計した。

注2. 「音楽を通じた豊かな情操教育」は2名のため省略した。

った」「子ども達と久しぶりにふれあうことができ、すごく楽しかった」「子ども達がかわいらしかった。でも、どう対応したらいいかわからなかった」「2回目ということで流れは掴んでいた。紙芝居を初めて行ったので、とても緊張した。でも子どもたちとお母さん方がとても生き生きしていて良かった」「母親がいるなかで、子どもたちと関わるのはとても気を遣った」など、子どもに関するボランティアを行うなかで保護者とのかかわりの重要性を学んでいた。

高齢者や障がい者とふれあうことができる「高齢者施設などにおける介護支援教育」では、「初めて見ること、初めて聞くことがほとんどだった。もっと自分自身勉強して知識をつけようと思った」「利用者さんの食事と歯磨きを少しだけ介助させてもらった。とても緊張したけど、すごくいい体験をさせてもらった」「ベッドで寝たきりの人、車椅子の人、マットでごろごろ寝ている人と、障害といってもたくさん障害の人がいるのだと思った」など、初めての体験によって感動し、知識への獲得に繋がっていた。

不登校の子ども達がいるフリースペースや保健室、あるいは特別支援学級での活動である「不登校児童・生徒支援」では、「初めは戸惑いもあったが、子どもとたくさんふれ合えて良か

った」「特別支援学級での体験は大変勉強になった」「先生方から親切な指導を受け、自分も養護教諭になりたいと思った」など、ボランティア活動を行うなかで、学生は将来の自分をイメージし、自己実現を具体化しようとする機会になっていた。

保健センターでの喫煙防止教育を実施する「地域と連携した健康教育」では、「何度も練習して大変だったが、拍手されたとき満足だった」「本当に大切なことを伝えることができた」「言葉の使い方や声の出し方、間の取り方など勉強になった」など、一生懸命取り組んだ自分達を受け入れてもらえたという達成感が生まれていた。

地域の方々と学生が共に学び資格を有することに繋がる「救急時の対応教育」および「アニマルとの豊かな生活支援教育」については、自由記載としての報告はなかった。

IV. 考 察

1. 各プログラムと参加理由について

「柏原市との連携プログラム」については、就学前の幼児が集える「ほっとステーション」は、子どもと保護者を支援する柏原市の子育て支援事業であり、利用する子どもが自由にのびのびと遊べる工夫が成されており、学生は、そのなかで子どもとふれあう。そして、このプロ

グラムは柏原市との連携でもあり全学科の学生が参加できる。また、「子育て支援プログラム」については、多胎児の兄弟姉妹やその保護者に対する子育て支援や保育や病院での保育に関する支援活動を行っている。遊びは子どもの生活そのものであり、子どもは遊びを通して多くの能力を獲得していく⁵⁾。地域に開かれたさまざまな子育てに関する取り組みは、子どもが遊びを通して互いにふれあいを持ち、そのなかで人と人とのつきあい方を学び、その一方で、学生は子どもとのふれあいによって自己の可能性を見出すことができると考える。また、子どもとのふれあいのみならず、その保護者とも交流を持つことができ、緊張と同時に子どもに対する接し方の知識がより広がったのではないかとと思われる。

また、「高齢者施設などにおける介護支援教育」についての活動の場は、歯科衛生学科の学生が要介護高齢者を対象とした特別養護老人ホームや介護老人保健施設、あるいは障害者活動センターなどで活動をする。簡単な歯磨きのお手伝いは準備を含め行うものの重度障がい者への口腔ケアを行うなど、高度な専門的行為には至らない。そのため、歯科衛生士を目指す学生は、「必要な知識が得られる」と思いボランティア活動に参加した反面、自分の知識不足を痛感したのであろう。また、そのことが動機づけとなって学習意欲に繋がり、「勉強して知識をつけようと思った」などの自由記載があり学習意欲をみせた。また、「地域と連携した健康教育」については、市町村や教育委員会が主催する健康展などでの健康教育にかかわることが多い。これら両プログラムは、幅広い活動を通して、要介護者や一般市民、家族など幅広い知識が求められ実践も必要とされる。そのため、学生は両プログラムへの参加を躊躇する可能性が考えられる。そのため、選択理由は、「先生に勧められた」が最も多かったのかもしれない。その一方で、「必要な知識が得られる」「授業に役立つと思った」も選択しており、教員の後押

しが必要であったことが窺われる。

「不登校児童・生徒支援」については、ボランティアの参加数が最も多かった。学生は、小中学校などの保健室や施設など、不登校の子どもへの支援活動にかかわることから、ボランティア活動を通じた養護教諭体験として、学生自らがこのプログラムの必要性を感じていたのであろうか。

つぎに、ボランティアの参加者が多かったのは、「アニマルとの豊かな生活支援教育」であった。これは、専門講師のもと、医療秘書コース学生によって行われている。動物を介在させて行うアニマルセラピーを通して「癒しの心」を地域の方々とともに学び、その学習効果を施設などで実践するものである。「興味があった」「楽しそうと思った」は多くの学生が参加理由としたが、その一方で「苦手分野を克服したかった」を選択した学生がみられ、動物を扱うことが関与しているのかもしれない。また、「救急時の対応教育」については、日本赤十字社救急法救急員養成講習に関する活動であり、学生は地域の方々と共に講習会を受講し、資格を取得することができる貴重な活動である。もちろん、講習会内でのボランティア活動にも携わっている。しかしながら、2009年度はインフルエンザの影響のため開講できなかった講習会もあり、残念であった。

いずれのプログラムについても、他者との関係、学生間との関係などがかわり活動の場が広がり、それに伴って、さまざまな新たな人間関係も作られると考える。内発的動機づけについて、佐伯⁶⁾は「他者の目に映ると想定される自己の認識や、自己の下界への行為とその結果の意味づけ、他者の応変の意味づけなどに焦点を当て、いわば『関係論的な』理論化が進められてきている」と述べている。プログラムによって、その対象者が子どもや高齢者、障がい者のみならず保護者、市民などと多岐に渡り、学生に新たな刺激を放ち、それが動機づけともなり自己への学びに向かうと考える。エリクソン

(E. H. Erikson, 1973) は、18～22歳を青年後期とし次の成人期への準備期として捉えており、その年代である学生はさまざまなことにチャレンジし、可能性を試す時期である。学生にとって、自己のアイデンティティを確立するための試行を繰り返すモラトリアムの機会に、ボランティア活動は重要な意味を持つと考える。学生が、ボランティア活動をするきっかけはさまざまであるが、学生の育ちに重要な要素となっていると思われる。

2. 学生の心構えについて

ボランティア活動を行う場合、施設や学校など、公共の場所に出向くことが多く、また、さまざまな方々と出会うことになるため、他者に迷惑をかけないようにとの思いから、主として各プログラムの担当教員によって学生に服装や時間厳守に関する注意事項を伝えたり、必要な持ち物を説明している。場合によっては、挨拶の仕方に至るまで伝え練習することもある。学生がボランティアの参加理由に挙げているように、これがきっかけとなって就職に繋がる場合もあるため、各教員は細かな心配りを行っていると思われる。学生の調査結果が示すように、「遅刻しない」を選択する学生は非常に多く、また、身だしなみに関することについても、多くの学生が心がけていたと思われる。学生は、授業や就職などに役立つと考えていながらも、「必要な勉強をする」については少数であり、それよりもマナーに関する事柄を重視している傾向が強くみられ、教員からの助言が関与していることが窺われる。

3. ボランティア活動後の学生の思いと効果について

ボランティア活動の体験を通じて、新たな発見を感じた者や戸惑いを感じた者など、さまざまであったが、学生の内面の気持ちを重視した活動であったと思われる。プログラムによって異なるが、ボランティアを行った場所には、保

育士、養護教員、看護師、社会福祉士、介護福祉士など、さまざまな専門職が勤務していることから、専門職の方々と接し、行動を観察できることによって、多くの学びを得ると同時に、自らが目指す職業をイメージできると考える。また、伊藤⁷⁾は、仲間にもできていることならば、自分にもできだろうと思えることによって、自己効力感を高めることができるという。本学の場合、複数の学生と一緒にボランティア活動に参加することがそのほとんどである。不安を持っていた場合でも、仲間の存在によって乗り越えられることは大きな自信にも繋がるであろう。

一般的に、ボランティア活動では、子ども、高齢者や障がい者への個人支援やサービス志向が強く、対人支援活動が多い。米山⁸⁾は、「福祉ボランティアの活動は命と人権を大切に守りあい、かばいあい、支えあい共に生きる人間的な営みである」といい、さらに「ボランティア活動をとうしての共感はずなやかに生きることを私たちに教えてくれる」と述べている。もちろん、本学のプログラムには福祉ボランティア以外も多く含まれているが、学生の自由記載からは、どのプログラムからも初めて味わった多くの体験が綴られており、多くの感動があったことが推察できる。

ピノー⁹⁾は、学校教育とは異なるもうひとつの教育があると主張し、従来の「教える」ことを軸とした他者教育の極とは別の、「自ら変わる」という自己形成を軸とした成人の成長の極だといい、自らが自らを振り返ることによって、自己形成が生まれることこそが重要な意味を持つとする。学生が、ボランティア活動をした後、いろいろなできごとを振り返ることは、また学びを獲得することに繋がる。人は過去の出来事を個人、あるいは集団の自己形成の出発点としながら、現実を生きているが、そのなかで、何故このような出来事が生じたのかを捉え直すことが必要であり、そこに重要な意味がある¹⁰⁾。ボランティア活動は、一方的な援助や支

援ではなく、人との関係を通し気づきや発見が生まれ、新たな学びが導き出され、学生一人ひとりが対象となる人達と共に未来を創設していくと、客体から主体へのパラダイムを期待するものであろう。自分の知識と適度なずれをもち、葛藤やおどろきを引き起こすような対象について、人は知的好奇心を抱く¹¹⁾。学生の意見から、ボランティア活動によって初めて遭遇する事柄による知的好奇心の高まりが窺えた。また、今回の調査によって、ボランティア活動を行う学生の動向を確認することができたと考えられる。

V. ま と め

本学が行っているボランティアは、各プログラムにそれぞれ特徴を兼ね備えており、学生は、各自が自らの欲する目的に沿って活用していることがわかった。廣瀬¹²⁾は、「地域学の活動は、地球課題に関する共同学習を基礎としながら、生涯学習機会を創り出す主体となり、社会参加と学習の循環を促している」と述べている。このように、ボランティア活動が、自己教育の場としての機能を果たし学生の学びの場として有効であることが確認できた。本学の場合、内面が問われないままに「美德」という奉仕だけを捉え、それをボランティアであるというよりは、むしろ学生の自発性によって悩んだり戸惑ったりしながら考え、チャレンジしていた。そして、何らかの発見を求めるそのプロセスに学びの能力が培われ、それが満足や充実といった意識傾向にあった。学生は、ボランティア活動を肯定的に捉え、主体的に学べる自己教育の場として活用していた。そして、それは学生のスキルの獲得に繋がっていることが示唆された。また、本調査によって、ボランティア活動を行う学生のさまざまな思いを知ることができ、本学におけるボランティア活動の意義を考える契機となった。

本学におけるボランティア活動は、学生の学習に対する意欲を引き出す要素を含み、個々の

プログラムが、先輩から後輩へと持続可能となるように、さらなる充実を図っていく必要性が感じられ、今後も研鑽を重ねていかなければならない。

謝 辞

地域支援交流センター運営委員会における「地域支援交流センタープログラム」を遂行するにあたり、ボランティア活動を受け入れて下さっております関係機関の先生方、ならびに本学の教職員の先生方には、多大なご支援とご協力を賜っております。ここに、深く感謝申し上げます。また、本稿作成に際し、調査にご協力を下さった学生達にも御礼申し上げます。なお、「地域支援交流センタープログラム」に関する個々の活動内容は、本委員会の活動報告書(2010年5月発行)をご参照いただければ幸いです。

文 献

- 1) 嵯峨座晴夫：『少子高齢社会と子どもたち』中央法規出版、p.75, 2001.
- 2) 梶田毅一：『自己を育てる』金子書房、p.102, 1996.
- 3) 吉村恭二：『ボランティアの世界－私が変わる・社会が変わる』築地書館、p.97, 1999.
- 4) 前田圭子：「ボランティア活動推進のヒント」『豊かな学びの世界』社団法人日本青年奉仕協会、pp.195-196, 1992.
- 5) 高山佳子：「発達心理学の基礎 I」『現代の発達環境』ミネルヴァ書房、p.121, 2000.
- 6) 佐伯胖：「学びをどう学ぶか」『学びへの誘い』東京大学出版会、p.175, 1997.
- 7) 伊藤崇達：「自ら学ぶ戦略を育てる」『学ぶ意欲を育てる－動機づけの教育心理学』金子書房、p.25, 2007.
- 8) 米山岳廣：『ボランティア活動の基礎と実際』文化書房博文社、p.173, 2004.
- 9) Gasuton Pineau/marie-Michèle : produire sa vie : autoformation et autobiographie, edilig et editions Saint-Martin. 1983. 末本誠・前平泰志訳『人生の創造－自伝と自己教育』末本はビノの「自己教育論」について紹介している。「労働と職業を軸にしたフランスの生涯教育の展開」『神戸大学発達科学部研究紀要』第 14 巻第 2 号、pp.305-316, 2006.
- 10) Sara Mills : 『Michel Foucault』酒井隆史訳、青

- 土社、p.188, 2006.
- 11) 深谷優子：「教育心理学」『学習意欲と学習指導』建帛社、p.122, 2007.
- 12) 廣瀬隆人：「ローカルな知としての地域学」『ローカルな知の可能性』東洋館出版、pp.43-44, 2008.